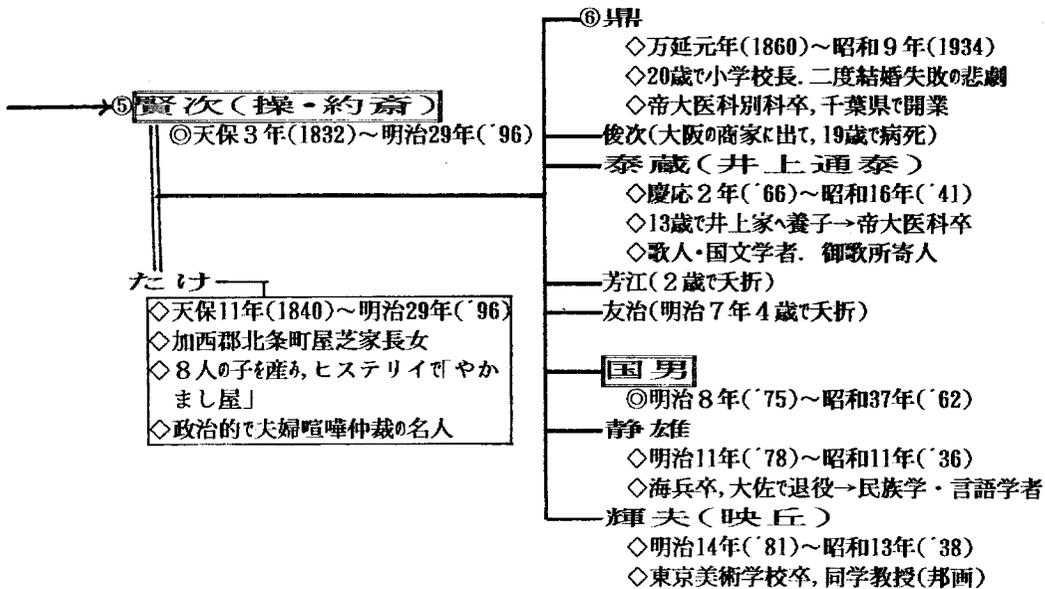
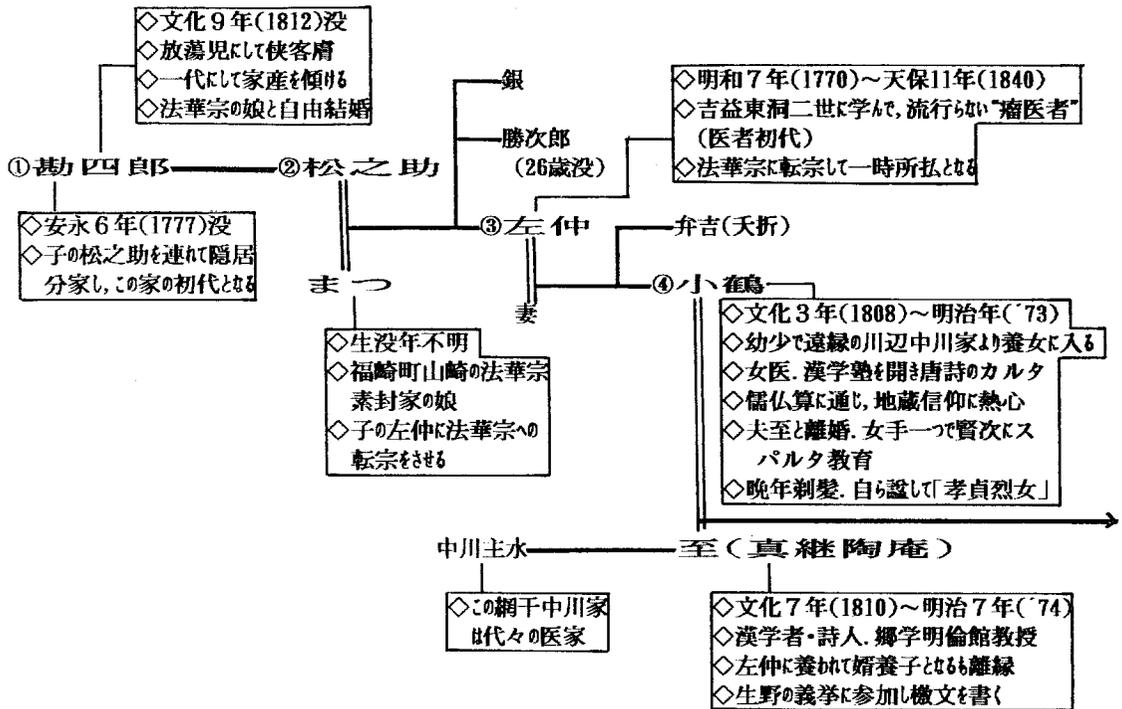


# 松岡約斎とその子柳田国男

隠岐鉄雄

《松岡家系図》 国男の「故郷七十年・同拾遺」より、宮崎修二郎著「柳田国男 その原郷」を参照して作成。  
 年齢は数え年。○の中の数字は戸主の代数。



## 松岡家

柳田民俗学が、国男の個性を基盤として成立しているとは、よく言われるところである。実際、国男は常人とは異なった資質の持ち主であり、そのことを抜きにして柳田学に迫れば、核心から大きく外れた理解に終わってしまうであろう。そこで本稿では、その国男の資質の源流を、国男の実家である松岡家にありはしないかという仮説のもとに、考察して見たいと思う。

国男は、柳田家に婿養子に入った人であり、実家は兵庫県の現神崎郡福崎町辻川にあった松岡家である。その松岡家の代々の歴史を、系図を作成してみると、上記のようになるが、その経歴を国男の『故郷七十年』・『同拾遺』と、宮崎修二郎著『柳田国男 その原郷』によって説明すれば以下のようになる。

始祖は、同家の伝承によれば播磨赤松氏の後裔で、足利末期に辻川の地に来たことになっているが、「ハッキリしたことは、勘四郎という人が、伴の松之助をつれて隠居、別家を立てたこと、その没年が安永六年（1777）である」ということであり、この勘四郎が初代ということになっている。

そして、二代目松之助は「大家の息子で胆勇のある放蕩兒、侠客膚の人」であったため、「一代で家産を傾け」た人物で、文化九年（1812）に没したが、以後この家は終局まで貧乏生活から立ち直れなかった。注目すべきは、彼が、松岡家が天台宗門であり、「当時この地方は宗門が厳格で他宗との縁組をする例はなかった」慣例を破って、福崎町の素封家の法華宗の娘と「自由結婚」をしてしまったことである。

二人の後を継いだ三代目の左仲は、幼い頃から京都に出て、苦学して吉益東洞二世の門で医術を学び、帰郷して開業したので、以後、同家は医家となった。彼は、養女小鶴によれば、「幼ヨリ甚ダ讀書ヲ嗜ミ、閑ヲ儉ンデ耽讀シテ常ニ寝食ヲ忘ル。弱冠ニシテ儒ニ志有リ。」であった。兄が没したために止むなく医業を継いだため、「（医を）太ダ行ハズ。終ニ貧困ヲ以テ世ヲ没」<sup>(1)</sup>した人であった。彼には「音韻の研究の著書」があり、また、医学上の絵図を描いたりもしたという。

その左仲が父松之助の死後、「法華宗の娘」であった母が、「親孝行を楯にと」って改宗を迫ったために、檀那寺を法華宗へと改宗してしまい、仏壇の本尊を新仏に取り替えてしまったのである。その結果、天台宗の寺が藩当局に告訴したので訴訟事件に発展して、全面敗訴となり、法華宗寺院の住職他三名が追放になったばかりでなく、一家は「所払ひ」となり、一時、左仲夫婦と幼い小鶴の三人は、左仲の医学修業の地であった京都へ逃れて、貧窮生活を余儀なくされた時期があったという。この悲劇の背景には、孝行者であった左仲が母の宗教熱に同化しただけでなく、自己の信念に妥協を許さない愚直な性癖で突き進んだ姿があった。

寡欲であった左仲には、大きな瘤があったために“瘤医者”の渾名がつけられて、人に会うのを嫌って往診を断るような性格であったので、文字どおり「流行らない医者」として生涯を終えた。彼は愚直で狷介な人生を歩んだ人であったといえよう。

彼は、貧窮生活を意に介さずに、本業よりも読書・研究に情熱を傾けた点に於いて、さ

らに、宗旨替えに見られる宗教的情熱に於いても、松岡家の家風創業の人であった。読書人にして信仰心に篤い松岡家の家風の軌道がこの人によって敷かれ、以後、世間一般の評価を超えた特異な家となる。

四代目の小鶴は、国男にとって、その誕生の二年前にあたる明治六年に没した祖母である。彼女は、幼くして遠縁の川辺中川家より左仲の養女になった一人娘であった。病身であったが「気性の激しい人で、一生涯、片時も孝と貞とを忘れず暮し」、「自ら諡して『孝貞烈女』と云つたほど」の烈婦であった。

彼女は二十六歳（数え歳…以下同じ）で、左仲の下に養われていた四歳年下の中川至を婿養子とし、翌年には賢次（操・約斎）を産んだが、結婚生活七年にして、至が左仲によって離縁されてしまった。その後、彼女は再婚話には頑として応じずに寡婦で通し、離縁して二年後に養父左仲が没してからは、九歳になっていた一人息子の賢次に夢を託して、その教育に全てをかける生活を送ることになった。

小鶴は、“多病”の質でありながら、左仲の後を継いで医者をした。「醫術も世渡りも相当に拙かつたらしい」彼女は、独学で儒仏に亘って学び、詩歌文章・書数を善くした。父左仲から「算木」による算法を学んで「高等数学」ができ、「天が下の歌の數を知る法」（歌の數には限界があるとするもの）という書を著わしたりしたが、むしろ、漢籍に通じていた方が得意であり、「縞衣」という号を付けて漢学の塾を開き、女兒に「お師匠さん」と呼ばれて、<sup>(2)</sup>「唐詩選のカルタ」を教えた。そして、法華信仰に加えて地藏信仰にも熱心であり、毎朝近くの地藏堂への日参を欠かさなかった熱心な仏教信者でもあった。彼女は、当地の大庄屋で、「中井竹山の系統を引く學者」であった三木公逢に漢文で論争を挑んで、『三木公逢に與へて佛を論ずる書』なる一文を著わし、自分の信ずる「六道輪廻を以て」朱子学の理學を攻撃した。その文章は、孫の国男をして「大文章」と感心させたほどであった。

ところが、彼女は心身が正常でないところがあった。自ら告白するところによると、

「余稟受薄弱。年十三ニシテ偶マ疾病ニ遭ヒ遂ニ全ク癒ヘズ、以テ十六七歳ニ至リ疾益加ハル。其ノ證四肢倦怠シ、心下痞悶シ、或ハ冒眩或ハ健忘、心志昏迷シ、思慮鬱血シテ至ラザル所無シ。人ニ對シテ寒暖ヲ叙スルコト猶且ツ能ハズ。大イニ自ラ之ヲ憂ヒ且ツ自ラ愧ジ、鬱々トシテ潜伏シ、潜伏シテ愈鬱ス。常ニ人ニ見ヘザル者七八年。---嫁期ヲ過グルニ及ビ其ノ疾自ラ失スル者十二七居リ。然レドモ諸證全クハ除カズ心身猶苦トスル所多シ。---遂ニ全キ人タルコト能ハズ。自ラ以テ終身之痛恨ト爲ス。」<sup>(3)</sup>

というのであるから、その異常性は並大抵のものではなく、彼女は腺病質であっただけでなく、強度の鬱病であり自閉症あったことが分かる。これはおそらく、生来の資質に加えて、極度な陰性資質を想像させる左仲の下での生活の中で固められてしまった痼疾ではなからうか。上記の論争文を「一面識もない」三木公逢との論争であったと国男が語ったのを読んだ時、同村のしかも大庄屋であった名士と、そのような関係は有り得ないことだと不思議に思えたが、「人ニ見ヘザル者七八年」であったとする小鶴の述懐によって、その疑問は、氷解するのである。

小鶴の婿養子となった至は、網干中川家という代々の医家に生まれ、兄善繼と若死にし

たその子で賢次の従兄弟に当たる人物もまた、長崎に遊学の経験を持つが、至は漢学の道を進んで郷学明倫館教授となり、詩人でもあった。それがその後、如何なる理由によるのかは不明であるが、左仲に「養はれ」ることになり、さらには小鶴の婿養子となった。夫婦の間には一子賢次が儲けられたが、賢次が七歳の時に、至は左仲の怒りに触れて「家から追出」され、小鶴に謀る事もなく離縁となってしまった。離縁後の至は、但馬の生野に移って「入夫」して真継姓を継ぎ、陶淵明に因んで陶庵と号したが、国男誕生の一年前の明治七年に六十五歳で同地に没した。その間、国男の説くとくろでは、「生野の義舉」(1863)に際にして「平野國臣、美玉三平、河上彌一等」の「黒幕となって檄文を起草したり」したが、それ以後は「世を忍ぶ形で暮らしてゐたらし」く、明治元年になって「舊功が認められ、特に士族に陞され、佩刀が許され」たということになっている。

至が離縁された原因を小鶴の文章によって想像すると、左仲と「其ノ性大イニ相合ハズ」であったし、「余モ亦良人ト士風不適」であったことを挙げているが、むしろ彼女の方が結婚生活に不適だったと言わなければなるまい。至が、若くして郷学明倫館教授となったほどの学力に加えて、「頗る辯舌が達者で評判とな」った人物であったところからすれば、典型的な陽性人間であったと想像されるが、“癩医者”と呼ばれて人間嫌いであった陰性人間の養父左仲とは、余りにも対照的な印象を受けるところからも、また、左仲の影響下に従順に成長した小鶴の極端な鬱病的資質から見ても、至の性格が、父娘にとって耐え難い軽薄才子と感じられたのは当然だったかも知れない。

その去った後の至に対し、一子の賢次は長ずるに従って思慕の情を増していくが(後述)、至の孫にあたる国男にも、賢次はこの父のことを誇らしい人物として印象づけたらしく、明治四十二年に、国男は生野の菩提寺に詣でて、「予は性質も容貌も共に此翁に似たかと思はる。懐かしさに堪えず。」と述懐している。(4)

賢次は七歳で両親の離縁、父至(陶庵)との生別という悲劇的境遇に陥った。そして、両親の離縁後二年で、賢次に「句讀ヲ授ケ」ていた祖父左仲が七十一歳で没してからは、母一人子一人の生活となった。寡婦となった母小鶴は、左仲ゆずりの偏狭と鬱病的自閉症のもと、賢次が九歳になっていたこの年から、家再興の夢を託して厳しいスパルタ教育を始めた。賢次に「一日一詩」を賦すことをノルマとさせ、十一歳からは漢文を白文で素読させる“厳母”ぶりを見せた結果、賢次は「幼ナリト雖モ、與ニ雅趣ヲ談ズ可キ者有ルニ似タリ」という進境ぶりを見せ、小鶴に「余常ニ之ヲ楽シム」と云わせるまでになったっていった。

ここに至るまでの松岡家の特性と言うべきものを挙げてみると、

- ①農村にありながら農業から離れた家となったこと。
- ②医者となってからのこの家は、本業の医者は流行らず貧窮であったが、学問・教養の方に生き甲斐を感じる家となったこと。
- ③左仲以来の、貧窮を意に介さずに学究生活を生き甲斐とする生活の中で、極度に陰性で世間嫌いの、鬱病的資質が醸成されたこと。

の三点が挙げられよう。

古くは、「辻川はあまり廣くない村で、その大部分を松岡一族で耕作し」た中の一つの家であったが、二代目松之助が「一代で家産を傾」けた結果であろうか、没落した後の三代目左仲の時代以降は、流行らない貧乏医者の家となった。そして、国男が「私の家は早くから持地を手放し、村と農業によって結び付けられない半漂白民であった。」と言う状態になったのも、この左仲時代からであろうかと思われる。

しかしこの家では、その左仲を初代として学問・教養に生き甲斐を感じる特性が始まり、それも、正統とされるものから離れた一風変わったものであった。そしてそれは、養女小鶴から孫賢次へと継承・発展された後に、国男兄弟の世代になって開花していくのである。また、学問の家となって以降のこの家の痼疾である、陰的な鬱病的資質もまた継承され、小鶴からその子賢次へ、さらに孫の国男にまで、遺伝的ともいふべき資質として継承されていくのである。

## 賢次（約齋）の軌跡

### （一）『秋元安民伝』

明治二十年(1887)に十三歳になった国男は、千葉県布川に医院を開業していた長兄鼎の下に移って養育されることになるが、晩年に「約齋」と号した賢次もまた、二年後には妻子を伴ってその鼎宅に身を寄せることになった。その賢次が明治二十三年、三男泰蔵（井上通泰）が関係していた『柵草子』第九号に、『秋元安民伝』という「松岡約齋口述・松岡國男筆記」という、五十九歳の父と十六歳の子との合作になる、次のような短文を寄稿している。

「(みかしほの播磨は)古より名ある物しり人のまれまれならず聞えたるあるが中にも、くさぐさの書にしるされて遠き方にも名のひびき渡りたるあるべく、一生さちなくて、なき後にさへ埋木の花もさかで人の跡とはんとせぬもあり。名の聞えたる人押なべてすぐれ人とも云ふべからず。又は草深き野山の奥にかくれはてたる人にも、如何なる心ばへかありけん。---近き頃の人にて斯の道にすぐれたりと聞えしは、野の口隆正、秋元安民なるべし。何れも先つ年身まかりたれど、皆我友どちにて、其頃は行もし来もしたるが、年へぬるままにおぼろおぼろしげになるを、いかでかき残してんと思ふに、隆正は年も我よりあまた兄にて交りも久しからぬを、---(秋元安民は)野の口隆正の翁〔其頃小野侯に仕へたり〕につきて、猶も其道を究めたりとなん。初め藩の学びやに教へ人となりて---友どちのいと多くて、大方の人は問よりける---」(5)

ここに記された「野の口(野々口)隆正」とは、幕末から明治初年にかけて国学の大立者として、また、維新政府初頭の神道行政に中心的位置を占めた大国隆正のことであり、また、「秋元安民」というのは隆正門下で、姫路藩尊王攘夷派の魁とされる人物である。

よく言われるように、柳田民俗学が国学の伝統を多大に継承した上に成り立っているとすれば、死の六年前に当たる晩年の父賢次(約齋)が、十六歳のわが子国男に誇らしげに語って記録させた自らの学問の軌跡を、その個性・資質によって織り成されていった経歴とともに、探索してみることが必要であろう。

## (二) 好古堂へ

賢次は、十三歳で小鶴の手元から離れて加古郡安田村の医者梅谷という家の家僕となったが、ここで十四歳になった翌年（'45）、この医師が漢詩好きであったところから、藩饗好古堂の藩儒角田心藏義方に紹介され、それと恐らく関連し相前後して、母小鶴の方も遊学する賢次を想う『望南篇』という一文によって、その「孝貞烈女」ぶりが藩当局に聞こえて表彰されるに至った。のみならず、賢次は角田の後見を得て、廃校直前の仁壽山饗<sup>じんじゅさんこう</sup>への入学を許されたのである。そして極く短期間そこに学んだ後に、この学校が藩饗好古堂に吸収合併されたのに伴い、そこに移籍的に入学を許されたばかりでなく、「官費生」の特典まで与えられるという僥倖に恵まれたのである。<sup>(6)</sup> 母子の感激たるや想像に余りあるものがあつたであろう。

好古堂での賢次の学生生活には特筆すべきことが二点ある。第一には、十六歳の時に、藩主酒井緝光が初の国元入りをして好古堂学生の「講經」を試みた時、彼は選ばれて「經筵」に上り、君側に咫尺して一詩を賦す榮譽を与えられたことである。彼はその時、「書ヲ學ビ劍ヲ學ビテ家ニ還ラズ。青春ニ遇フ毎ニ歳華ヲ感ズ。」で始まる七言律詩を賦し、恵まれた環境の下で学業の日々を送り青春を謳歌できることへの、少年らしい感激と興奮を披瀝している。

第二の点は、賢次がこの好古堂で大国隆正門流の国学に接し、その影響を少なからず受けることになったことである。

好古堂においては既に、文政年間（1818～'30）から隆正門下の斎藤守澄（1809～'49）が国学教授となっていたが、国学の発展と流行の時運に乗って、賢次が入学した頃の弘化年間（1844～'48）になると、「国学局」が設けられて斎藤が引きつづきその教授となった。そして嘉永元年（'48）賢次十七歳の時、隆正が好古堂に招かれて「國典を講」ずるに至っており、賢次もおそらくその講筵に列しているのである。この隆正の来講によって、好古堂の国学発展に弾みがつき、翌嘉永二年には「国学局」が発展して「国学寮」という独立した学部ともいふべき大きな存在となった。そして、同年斎藤が没したのを継いで、その女婿で同じく隆正門下の秋元安民（1823～'62）が教授として迎えられたのは賢次十八歳の時であった。

このように、賢次が在学していた時期の好古堂はまさに国学の興隆期にあたり、斎藤と秋元の背後にあって、大国隆正が自己の教学を浸透させようとして積極的に働きかけていた時期に当たっていた。この時期の隆正は、平田篤胤没後における国学界の主流の座を獲得すべく、「国学四大人」説を唱えて自己の本流性を主張し、また、「本教」・「本學」運動を精力的に展開して、教勢拡大に精力的に取り組んでいた時期であり、<sup>(7)</sup> 好古堂への働きかけは、中核拠点獲得のための旺盛な意欲の下になされていたのである。隆正はこの頃の教勢拡大状況について、

「わがしれるところにては、はりまの姫路に好古堂の別館ありて、本學をむねとする學寮あり。秋元安民これをつかさどれり。はりまの小野に歸正館ありて、野々口正武（隆正の養子。隱岐注）これをつかさどれり。石見の津和野にも---しかれどもいまだ盛業

といふにいたらず。」（『馭戎問答』）

と述べており、隆正の国学を導入するのに先駆的であった小野藩と、隆正出身の津和野藩と共に、姫路藩への教勢拡大への彼の意欲が並々ならぬものであったことが知られるのである。

賢次はこうした好古堂で国学の道に入り、隆正・安民という訓詁の学よりも思想性を重んじ、時代の中に行動していく傾向の強い人物の指導によって、国学に開眼していったのである。

前に挙げた『秋元安民伝』に、「---隆正は年も我よりあまた兄にて交りも久しからぬを---（安民は）物にかゝはらでくしき行多かりしかば、つひに世にあはでや思ふ事もならずて終りにき。幸少なきものしり人とやいふべけん---」と述べているところからすれば、賢次が身近かな存在として直接の指導と影響を受けたのは、九歳年長の秋元であったことが想像されるのである。

その秋元は、少年時代に「博覧強記」の「神童」と称され、また、「天資剛毅，身軀肥大」でもあった。国学者にして歌人としても名を成したが、洋書をも手がけて緒方洪庵と共同で写真術の研究をしたり、藩内出身の船夫がジョセフ=ヒコと共に送還されたのを用いて、自ら監督して西洋型帆船を建造したりした。好古堂での彼の国学教授は、譜代である藩情を配慮して「婉曲」に尊王教育をしなければならなかったというが、同藩尊攘派の中心人物河合良翰（屏山）とは同志であり、文久二年その良翰と共に上京中、天然痘にかかり四十歳の若さで没した。彼の没後に活躍した姫路藩尊攘派には彼の感化を受けた者が多かったといわれるから、<sup>(8)</sup>その死の時期が同藩尊攘派の行動開始時期の直前に当たるころから見れば、もし若死にしなければ、彼は、幕末激動の時代に、姫路藩尊攘派の中核的存在として活躍したであろうことが、想像される人材であった。

ところが十九歳の時（'50）、賢次はこの好古堂を退学させられてしまうのである。原因が何であったかについての確証はないが、松岡家の遠縁にあたる中川恭次郎の説明によると、<sup>(9)</sup>「性狷介にして師友に容れられず、中道にして校を逐はる」ということであった。「性狷介」であったとされるのは、左仲・小鶴ゆずりの性癖であり首肯できるところであるが、彼の場合は、この後の軌跡を見る時、処世に疎いところは常識を超えていても、二人ほどの極端な陰鬱性は感じられない。国男が、

「父は成長した後にその離別せられた祖父（至・真継陶庵…隠岐注）が戀しくてひそかに川向ひを通つて生野へ會ひに行き、祖母から激しく叱られて追ひ出されようとしたこともあったといふ。」

と述べているが、柳田泉氏は、それをこの時であるとし、学校に許可なくこの行動に出たことで官費をとめられ、退学を止むなくされたであろうとし、その背景には、「尊王敬神の思想」をもっていた賢次に、“時事”に対する“思想の動き”があったのではないかと想像する。<sup>(10)</sup>

この説に拠りながら私見を加えれば、退学の原因は次のように説明できよう。

本来、賢次が「官費生」として好古堂に入学できたのは、漢學教授角田心藏が彼の漢学

の素質を見込んで、特別の引き立てをなしたからであった。ところが、この時期になって、彼の国学への傾斜が進み、“時事”に対する“思想の動き”まで見せるようになった。そして、生来の処世の疎さから、彼の言動が「狷介」と取られても仕方のないものとなった結果、師の角田の不興を買うに至り、好古堂退学へとつながっていった、のである。「師友に容れられず」というのは、そういう意味にとれるのである。

また、こうした時に、彼が生野の父至(陶庵)のもとに奔ったのは、ただ単に肉親の情を求めてのことだけではなく、その父もまた尊王敬神の人であり、苦境にある自分と同じ陣営の思想を抱いていた人であるが故の行動であった。なぜなら、これより十三年後に陶庵は、「生野の義舉」に参加することになるからである。

### (三) 流行らない医者

こうして好古堂を去った賢次は、医術修業のため飾東郡木場村の医者の下で何年間か修業した後に、故郷辻川の小鶴の元に帰り医業を再開した。だが、「流行らない医者」はこの家の家風であり、彼の場合もまた本業よりも漢学・詩文・国学などに身を入れ、次第にその方面で名を成し、博識と文学で知られるようになっていった。ただ、「瘤医者」の左仲や極端な“鬱病”で自閉症でもあった母小鶴とは異なり、賢次は詩文による同学の士との交友の場をもつことができた。それは、姫路藩東隣の林田藩の藩醫敬業館教授であった河野鉄兜とその弟子石野黄裳とを指導者とし、播磨全域にわたる文人層の参加をみた漢詩人サークルのなかに加わっていることである。賢次三十一歳の時(162)に刊行された鉄兜・黄裳の選評に成る『播陽風雅』という漢詩集に、次のような彼の一詩が掲載されている。(11)

古墓 松岡雪香

松柏深キ中ニ細<sup>途</sup>分レ

茅花遠近斜<sup>曠</sup>ヲ帯ブ

斷碑磨滅シテ人ノ読ムコト無ク 今日誰カ冥漠ノ君ヲ招カン (原白文)

批評欄には「讀者ヲシテ愴然トセシム」と黄裳が書き込んおり、子の国男が二十代前半に新体詩人として活躍した頃の作品の中に、「夢」と共に「墓」が著しく多い〔後述〕のを想起させずにはおかない、陰翳に富んだ詩ではなかろうか。

賢次はこれより前の二十八歳の時、「たけ」二十歳を妻として迎えた。彼女は賢次とは対照的な性格で、気性が激しく、年と共に「やかまし屋」で「ヒステリイ」の度を増していくが、男の子ばかり八人(二人は夭折)も産み育てていく中で、「本ばかり読んでる」で生活能力に全く欠けた賢次を助け、「一家を切盛り」しながら貧しい生活を乗り切っていくのである。この後の賢次の人生は、この妻の存在があってこそのものであるといわねばならない。

この母親から国男が享けた資質としては、次の二点が挙げられよう。

①武士的選良意識と生活感覚。

②父賢次には見られない、社交性と社会意識を伴う強靱な政治性。

①について。「たけ」は国男によれば、嫁入前の安政四年(1827)から「二年足らず」、高須といふ姫路藩の家老の家へ奉公に出されていたことがある。この時の高須家の当主は高須広正であり、元治元年(1864)の「甲子の獄」で、佐幕派の領袖として尊攘派を大

弾圧した中心人物であった。(12) 賢次には見られない彼女の気位の高さは、国男兄弟にも濃厚に継承されているのであるが、彼女は、生来の強気の性格に、この時期の武家奉公で磨きがかかった武士的生活感覚で厳しく教育した結果であろうと思われる。国男の場合はこの母の影響の上に、帝大卒のエリートとして高級官吏の道を歩む間に、国家有為の人材としての責任感を伴った選良意識として増幅し、青年時代の白面の貴公子然とした風貌とともに、その特質とするところとなっていくのであり、彼の対象とした「常民」の生活感覚とは異質のものとなる。

②について。幼い頃の国男は、母の「バイノクソ」(腰巾着)であり、賢次が「本ばかり読んでゐた」ので、母の「獨り言の聴き役」であった。また、「聰明」にして「任侠」であり、屢々人を救ふを常とし「た母が、「夫婦喧嘩の仲裁の名人」であったとは、国男が得意げに語るところである。その時の母の姿を幼い国男は「バイノクソ」として「誰にもましてそんなことをよく見たり聞いたりし」たが、そこでの母は、「豊富な語彙、態度は全く政治的であつた」という。彼女は文字には暗かったらしいが、「人並すぐれた記憶力」を武器に、耳と頭で教養を身につけた人であり、四書・三部経の類を暗誦し、隣の部屋で国男が素読するのを指導することが出来たという。

後年の国男が「座談の名手」といわれたのは、祖父至が「頗る辯舌が達者で評判」であつた資質の隔世遺伝であるのに加えて、母「たけ」の資質を継いでいるのは確実であり、また、我が国民俗学の組織者として見せた能力に於いて、「政治性」に富んだ母の資質に負うところが大きであると言わなければならない。そしてまた、この両親が書物の上での学問のみではなく、父が「幼年型の傳承者」であつたに対して、母が「稍々詠嘆味を帯びたる前代生活の記述者」であり、(13)この両親が肌の温もりを以て、幼い国男に語つた「傳承」や「前代生活」が、後に發展される国男の民俗学の基盤となっていくのである。

#### (四) 熊川舎時代

『播陽風雅』に漢詩が載つた翌年、三十二歳(63)になつた賢次は、左仲同様に「流行らない醫者で思ひあまつて閉業しようとしていた矢先」に、姫路城下にあつた郷学熊川舎の「舎主」として迎えられるという幸運に恵まれた。彼は一廉の漢学者として認められ、好きな学問で身を立てることになつたのである。

熊川舎は、藩が文政年間に加古郡高砂に設立した申義堂と共に、庶民教育を目的とした郷学であつて、国男は町民立であつたような言い方をしているが、町民の資金援助に負うところが大きかつたにしても、本質的には飽く迄も藩の監督下にある学校であつた。(14)

賢次はこの熊川舎に足掛け八年いたが、その間、如何なる公的生活を送り、学問・思想上にどのような發展を見せたかを占うに足る資料は全くない。ただ、赴任した時には一人であつた子供が四人に増えたこと、家庭経済は決して豊かであつたとは言えなかつたにしても、柳田泉氏が「物的にもやや豊かであり、賢次の生涯で得意の時期であつた(15)と説くのが実態であつたと思える。また、教育者としての公的生活の方は、書生の生活指導に無頓着であつた賢次に代わつて、妻「たけ」が「やかまし屋」ぶりを發揮して、厳しい躰教育をしたというから、維新後の彼の行動の軌跡から推測して、人の師表となるに足る

姿勢と指導力を欠いたまま、教育に情熱を傾けることよりも、読書人・文人の殻の中で、漢学は元より、国学・神道の方面にまで研鑽を重ねる学究生活を歩みつづけたであろうと想像される。

ところが、賢次のこの熊川舎時代の八年間（'63～'70）は、幕藩体制崩壊から明治維新へかけての大激震・大変動の時代の真っ只中にあたり、姫路藩においても佐幕派と尊攘派の激突がみられ、動揺と混乱<sup>ただしげ</sup>がつづいた時代であった。藩主の酒井氏は、譜代の中でも最も幕府への忠誠心に富み、忠績は十四代將軍家茂の下で大老、次の忠<sup>ただとう</sup>惇は十五代將軍慶喜の下での老中首座となり、幕閣の中枢にあって幕府崩壊を防ぐために活躍していた。

しかし藩内に於いては、既に早くから形成されていた好古堂とそれに吸収合併された仁壽山巒の学閥が、この時期になって好古堂出身者＝佐幕派、仁壽山巒出身者＝尊攘討幕派へと発展し、激しい対立・抗争の展開が見られるようになっていた。そして、元治元年（'64）には、藩内尊攘急進派の多数が処刑・処罰された「甲子の獄」が起り、さらに明治元年（'68）になると、今度は尊王派が佐幕派を怨恨をもって処刑した「戊辰の獄」が展開された。<sup>(16)</sup>

熊川舎は姫路城下にあったから、賢次の周辺ではこうした血で血を洗う惨劇が展開されていたのであり、またこれより前の文久三年（'63）の「生野の義挙」には、実父至（真継陶庵）が参加していたことを、彼が知らなかった筈はない。

彼が尊攘思想に共鳴していたことは容易に想像できるが、激動の時代のこうした事件に彼がどのように対処したかについては、国男をはじめ誰も記録していないので、全く不明である。というより、彼は読書と詩作に生き甲斐を感じる文人であったばかりでなく、処世能力に全く欠けた社会生活不適應症の人であったから、「敬神尊王の志が並外れて厚い」思想を抱いていても、時勢に立ち向かって行動する能力などなかったというのが、実態であったといえよう。

しかし、その彼にも時代の影響が確実に訪れた。明治四年の廃藩置県に先立って熊川舎が廃絶され、彼は失職を余儀なくされ、生活の基盤を奪われるに至ったのである。

#### （五）維新後

賢次は維新後に「操」と改名している。時代の激変の中で「志操」の人たらしとする思いが、この名前に込められているかに見えるが、時代の激しさは彼の思いの通じるどころではなく、やがて精神に異常をきたすことになった。それは、国男の述べるところによれば、「明治初年に三十幾つかで神経衰弱にかかり、母がずっと介抱し、私が生まれる前の年（明治七年）までそんなことが続いた。」<sup>(17)</sup>ということであるから、明治三年、三十九歳で熊川舎を去る以前から、この「神経衰弱」が始まっていたのである。そうした中で彼は、河野鉄兜が教授であったことのある、姫路郊外の林田県「敬業館」の「教習」として迎えられたが、廃校直前の措置だったらしく、明治五年一月にはここも去って故郷辻川に帰っている。そして翌明治六年十一月には、前年の学制頒布によって速成された龍野更化中学校の「一等助教」として赴任したが、生徒数が足りないために翌明治七年に廃校になってしまい、またまた失職した。以後、彼は一年・半年と間歇的に職を得ることはあっても、

継続する定職を得ることなしに終わる。

この頃の彼は、一家の主人として多難そのものの時期であった。失職につぐ失職、二人の子の夭折、明治六年の母小鶴の死と、翌年には生野にあった実父至(真継陶庵)の死と相次ぎ、さらに、ただでさえ貧窮生活であるのに加えて、前記の『播陽風雅』出版と関係して本屋に裏切られ、多額の負債を背負わされてしまった。そうした中で「神経衰弱」症状が進み、明治六～七年の或る時期、彼は座敷牢に入れられるまでになったのである。

「ある夏の夜座敷牢から出して蚊帳の中に寝ませてゐた父が急に行方不明になり手をつくして八方搜したところ---(空井戸の中に)父は入ってゐたといふことを聞いたことがある。」

「父が若い頃にひどい神経衰弱にかゝつて、月の明るい或る夕方に、突然居なくなつたことがある。大騒ぎをして川原や山を搜して見たが居ない。それが御堂の脇の空井戸の中から、月を見ながら考へごとをして居たと言つて出てきたこともあつた。」<sup>(18)</sup>

世才に疎い文人が、時代に翻弄されて公私共に窮境に陥り、座敷牢から出された隙に彷徨い出て、人里離れた空井戸の底から独り「月を見ながら考へごと」をする。これは確実に、小鶴の「鬱病」資質を受け継いだ姿である。

この明治七年、賢次は、「神経衰弱」で妻「たけ」の介抱の下にありながら、自分の神道思想に基づいた松岡家の廃仏毀釈を断行し、「神道に復し」てしまったのである。「至孝の人」であった彼は、母の小鶴の影響で、自らも若い頃には法華經の写經に努めたばかりか、仏典の研究にまで進んだ経験を持ちながら、その母の死の翌年に、仏壇・仏具の一切を川に流して、左仲以来の熱心な法華信仰を根こそぎ葬ってしまったのである。ここに於いて松岡家は、二度目の改宗・宗教改革を徹底した形で断行してしまったことになる。「本居平田兩大人の學問に、引寄せられて行つた人」<sup>(19)</sup>であった彼は、明治初年以來、大國隆正門流の手によって強力に推進されていた廃仏毀釈運動や神葬祭運動に共鳴し、この挙に及んだのである。

特に、松岡家の宗旨が法華宗であったことが、国学の徒であった彼をやり切れない思いにさせずには置かなかつたものと想像される。なぜなら、彼が最も大きな影響をうけた平田篤胤が、

「俗の日蓮宗、一向宗など云ふ、十宗外の宗旨を奉ずる家々は、宗祖が教へ惡きからに、神國の御民として、神の尊き由緒を思はず、常の神壇は更なり、正月に歳徳棚を設くる事なく、曆をさへ受けざるも有る由なるは、御正朔を奉はらはぬ、頑民と云ふべき徒なれば、其は論の限りに非ず、」<sup>(20)</sup>

と述べる如く、神道と最も融合しがたい体質を持ち、神祇信仰を拒否していた宗門の双壁が、一向宗(浄土真宗)と松岡家の法華宗であり、篤胤が最も憎んだ宗門の一つであったのである。

こうして「神道に復し」た賢次は、松岡家に於ける「平田派の神主」となり、「先祖を祀るときも、自分の息子が死んだ時も、自分一人で拜んで、自分の感覺に相應するノリトを作」って神葬祭を実行する人になっていった。

貧乏学者の境遇は、「家でも弟子をとり講義」しても追いつかず、「近村有志の請にまかせて五里・三里と歩いて出張講義」をしなければならなかった。この頃のことであろうか、「友人はみな都へ出て偉くなつてゆくのに自分は神経衰弱のためにそれも叶わぬといふ」心境を、

奥山は住みよきものを世に出でて立ち舞ふ猿や何の人まね  
という歌を詠んでいる。

その彼が明治十年十一月、多可郡の荒田神社の「祠官」を「拜命」した。この神社は、「播磨二の宮」として古くから崇敬されていた式内社であるから、彼が「拜命」するに至ったのは、大久保正氏が説くように、<sup>(21)</sup>その敬神思想が「決して附焼刃的なものでなく、神道に帰依」していたが故であった。

#### (六) 隠居後と晩年

しかし、神官生活は「一年半ばかり」で終わった。月給が安く「貧乏といっても珍しい貧乏であった。」ので、神戸の師範学校を卒業した長男の鼎が、明治十一年七月に十九歳で辻川の昌文小学校訓導となった（その関係で国男は、就学年齢より三年早い五歳でこの小学校に入学した）のを待って辞任したのであろう。鼎の収入により経済的安定を得た賢次は、「神経衰弱」を抱える身でもあったので、これを機に家督を鼎に譲り、四十七歳にして隠居の身分となったのである。

そして、長男鼎は翌年二十歳にして神西二郡小学校校長兼校視となり、戸主にもなっていたので、結婚することになり、両親・弟達と一つ屋根の下に嫁を迎えて新婚生活に入った。ところがこのあと、国男をしてこの家を「日本一小さい家」と言わせることになった、松岡家崩壊の原因となる悲劇が訪れるのである。

新婦は、この時五歳であった国男に、その心優しさへの思慕の情を終生抱かせつづけた人であったから、多分よくできた人であったであろうと想像される。その彼女が、ごく短期間の結婚生活の後に実家に帰ってしまい、離縁になったのである。国男はその原因を、「日本一小さい家」に「二組の夫婦が住むこと自體、たとひ母がいかにしつかり者といふ人でないにしろ、初めから無理だつたのである。」と説明し、「やかまし屋」の「たけ」が、「子育てに疲れてヒステリイ氣味」の最盛期にあつて、嫁をいたたまれない思いに追い込んだのが原因であったかのような言い方をしている。

だが実は、悲劇はこれだけで済んだのではなかった。国男はもう一つのより深刻な、本物の悲劇を隠匿しているのである。宮崎修二郎氏のつきとめた本物の悲劇とは、

「じつはそのあと、もう一度長兄は近村から後ぞいをめとった。だが、この人もついに居つかれず、実家に逃げ帰ったものの、追い返されて行く所がなくなり辻川の婚家へ戻る途中の池で入水したのだった。」<sup>(22)</sup>

というのが本物の悲劇だったのである。後年の国男が、「日本一小さい家」の自己体験から、婚姻史・家族制度史などの研究の必要性を、繰り返して止まない背景には、この深刻な悲劇によって幼児期に刻印された原体験が隠匿されているのである。

この後の鼎は「ヤケ酒」で生活が荒み、「家が治まらなくな」った結果、小学校長を辞

めて上京し、やがて帝大医科別科を卒業して千葉県に永住し、医院を開業することになる。そして、明治二十年には十三歳になった国男を引き取り、二年後には賢次夫婦と下の弟三人もこの鼎宅に同居することになる。その後の鼎は、酒を楽しみにする人生を送り、激しく望郷の念に駆られながらも、弟達が度々訪問帰郷するのには同調せず、晩年になってようやく一度だけ故郷辻川を訪問したに過ぎなかった。そこには、癒し難い人生の傷痕を抱きつづけた孤独な姿が見られるのである。

この悲劇が展開されている時、賢次の姿勢は如何なるものであったか。国男はこの悲劇を説明して、

「---漢學者が中国の忠孝の字を、文字通りに、使つてしまつたといふことなどが、間違ひのもとだと考へてゐる」

と語っているが、宮崎氏は、この部分こそ、国男がこの悲劇によって抱かされた「激しい父なる人への憤り」を吐露した部分であると指摘する。幼少の国男の眼にまで、賢次のこの時の姿は、兄夫婦と母への配慮に全く欠けた<sup>つる</sup>怨すことのできない姿として映っていたのである。

だが、おそらくこの時の彼は、無関心だったのではなく、無為無策であるよりほかに為す術を知らなかったのであり、現実に背を向けるよりほかになかったのである。読書こそが彼の生き甲斐であった彼は、借財のために書籍の殆どを失い「本のない家」となっていたので、風呂敷を持って蔵書家のもとを借りに歩きつづける。机辺を掃除すると読書時の座布団の跡だけが変色せずに白い。その畳の白さは、社会生活の無能と父権放棄の代償として得た、彼の特権を象徴していた。

しかし、松岡家の悲劇は家の内部の問題だけでは済まなかった。外からの悪評と冷眼視がこの家に集中し、辻川の地での生活を耐え難いものにしていった。そのために鼎はこの地を逃れて上京したし、その学資捻出のためとはいえ、この事件から三年後には家屋敷を売却して一家は父祖の地辻川を去り、再びこの村には還ろうとはしなくなるのである。

鼎が去った後の賢次は、一旦隠居した身から復帰して、四十代半ば以後にもうけた国男以下の三人の子供（三男泰蔵は井上家へ養子）を養うために再び収入の道を得なければならなくなり、貧乏生活に逆戻りする。

そして明治十五年、思いがけないところから就職口が舞い込んできた。それは、伯耆赤崎に設立されたばかりの「順正書院」という漢学塾の教師として招聘されたのである。操は喜び勇んで応じ、単身赴任して行った。だが、ここでの生活もまた短期間で挫折せざるを得なかった。国男はその期間を「一年あまり」といっているが、その実際は「半年そこそこ」でしかなかった。(23)原因は、例の「神経衰弱」が再発し「ひどいホームシック」から異常となり、帰路には、同伴者が付けられて家まで送り届けなければならないほどの重症になっていた。この時操は五十一歳。

この三年後、兵庫県より「小學修身科教授。特に免許」されたのが、世に出た彼の最後の姿であったが、期間は不明である。小学生の修身科教授など、彼の能力の及ぶところではなかったであろう。

この間の明治十七年、帝大に進学した鼎の学資捻出の為に「日本一小さい家」の家屋敷を売却した一家は、「たけ」の郷里である北条町に移転した。そこでは、「裏長屋のすぐ隣りの貧民窟の近く」に住むことになった、と国男はいうが、そこは岸本由輝氏が説くように、「近く」ではなくして「貧民窟」そのものであったのであり、この地で「日本における飢饉の最後のもの」を「目撃」した、と国男が言っているのは韜晦であって、この一家そのものが飢饉に襲われていたのである。また、この年に高等小学校を卒業した国男が、故郷辻川の三木家（小鶴が論争を挑んだ三木公逢の家で相当な蔵書家）に「小さな居候」として一年間預けられて、「第一の濫読時代」を送ることができたのは、国男が言うように、「悪童」であった国男の躰のために託されたのではなく、本当の目的は“口べらし”であった。(24)

その後、国男は十三歳で鼎の下に送られて鼎を実質的保護者とし、明治二十四年に帝大医科（本科）を卒業した三兄泰蔵（井上通泰）が医学よりも文学に情熱を傾けていくのに指導されて成長する。

最早、賢次は保護者ではあり得ず、生活に零落した落魄の文人そのものの姿で余生を送る。晩年になって約斎と号した彼は「天保銭が八厘であることを生涯知らずに居」た世間知らずが進み、日常生活には妻「たけ」の保護を必要としたが、或る時何を感じたか、「自舊稿」の「詩歌文集雜著數十卷」を「毀」ってしまったという。(25)

前に挙げた『秋元安民傳』に

「---くさぐさの書にしるされて、遠き方にも名のひゞき渡りたるもあるべく、一生さちなくて、なき後にさへ埋木の花もさかで、人の跡とはんとせぬもあり。名の聞えたる人押なべてすぐれ人ともいふべからず。又は草ふかき野山の奥にかくれはてたる人にも、如何なる心ばへかありけん---」

と国男に筆記させたのは、この頃の彼の心境であり、「埋木」として「野山の奥にかくれはて」ようとする自己を、静かに容認する姿を、我が子国男に伝えようとする気持ちが伝わってくるのである。

明治二十九年六月、妻「たけ」が脳卒中で倒れ、約一カ月の後に五十八歳逝去した。賢次はその間の看病と心労で疲れ果て、妻の死後は「外出せずじっとしてゐるだけになってしまって」いたが、わずか二カ月の後に、妻の後を追うかのようにして急死した。享年六十五歳であった。

## 柳田学の核心

宮本常一氏は、国男の記憶力は、超人的な記憶力の持ち主であった南方熊楠に匹敵すると評価している。(26) この記憶力は、父賢次が「人の典例を問ふあれば則立ところに和漢の故事を歴擧して諸を掌に指すが如し」(27)といわれた血と、文字に暗くても記憶力に優れていた母「たけ」の血を、純粹培養した遺伝的資質であった。その資質を武器とした少年時代の国男は、賢次の指導の下に「讀書童子」として貪欲な知識欲を満たしていく。その結果、子供の域をはるかに超えた博識となり、父が文人仲間と、「大學」や浄瑠璃を引用

して応酬する洒落を側で聞いて笑うことができ、「この子は解つてる」と、文人仲間を呆れさせることができた。さらに、上京して本業の医学よりも文学熱に憑かれていた三兄井上通泰の助成による和歌と、父賢次の指導による漢詩の創作にも進んでいった。賢次は、そうした国男が非凡であることを見抜き、

其玉もみがけや磨けくはしほこちたるの國をかゞやかすまで (28)

という一首を、知らぬ間に国男の本の葉に書き込んだ。国男の「國」を盛り込んだこの歌に、我が子への慈愛に満ちた熱い期待の眼差しが感じられる。

だがしかし、柳田民俗学を発展させた国男の特性は、天才的記憶力だけではなかった。物に感応して止むことを知らない、豊かに過ぎるほどの感受性こそが、国男の資質の核心であり、そのことを見逃すと、柳田学の本質を見誤ってしまうであろう。国男は帝大卒業後に、「日本の農民は何故に貧なるか」というテーマを持って農政学に進んでから、一貫して経世済民の学を歩んだ人であった。しかし柳田学の核心は、より精神性の高い、日本人の抱いた“神”観念や“幽冥”観の問題にこそあった。そうした柳田学の核心に迫ろうとする時、彼の回顧談で異彩を放つ、幼少年時代の異常体験を見逃すことは出来ない。何故なら、その異常体験談は、八十三翁になった国男の心奥に、深く鮮烈に刻み込まれたていた自己認識であったからである。

幼少時代の国男は「神隠し」寸前までいった経験を二度している。一度目は四歳の時に、神戸に叔母さんが居ると信じて独りで歩きだし、一里ほど歩いた開墾場で運よく隣家の夫婦に拾われて助かった。もし拾われなかったら「それつきりになつてゐたに違いない。」と国男は述懐する。二度目は十一歳の時に、母に連れられて山に茸を採りに行った帰途に道に迷い、方向を見失って元の「淋しい池の岸に戻つて」しまった。その時、「茫としたやうな氣」になり、「よほど變な顔」になっていた国男は、母「たけ」が「えらい聲」でどなりながら、「背中をがあと叩きつけた」ことによって、はじめて正気に還ることができたという。もし、これが単身の時であったら、完全な「神隠し」となってしまったであろう、と国男は回想しているから、(29)この時の国男の顔付きは、物に憑かれたことが一目で分かるほどのものになっていたのであろう。

さらに、十三歳で千葉県布川の鼎の下に行き、二年余り学校にも行かずの自由放任・勝手放題の環境の中で、「第二の濫読時代」と共に、裸足で走り廻る「悪太郎」の生活を満喫した時期に遭遇した事件は、国男の資質が常人の域を超えたものであったことを物語っている。それは、地藏堂に奉納された絵馬に、産んだばかりのわが子を“子がえし”する母親の姿を見て「寒いやうな心になつた」体験だけではなく、次の二つの事件にこそ、国男の資質の典型が見られるのである。

第一の事件は、“狐の復讐”による「惨劇」に遭遇したことである。その蔵書で「第二の濫読時代」を送った近所の小川家の下男が、或る日、近くにあった狐穴を塞いでしまったところ、その後連日、狐の悲痛な鳴き声が聞かれた。国男は外出中の「ある日の晝下がり」に、その中の二匹の狐が自分を「見てゐるやうに感じ」、「體の動けなくなる思ひ」に陥り、「凝然と立ちすくんでしま」った。果たしてその翌日、小川家の隣家の主人が「突然

發狂してその妻女を斬り殺し、さらに、小川家にも乱入して主人に斬りつけるという事件が発生して、国男は非常な衝撃を受けて、「恐怖心に捉はれ」という経験をしたのである。

第二の事件は、「ある神秘的な暗示」と国男が銘打った事件である。小川家の蔵書のある土蔵の近くに、「小さな石の祠」があり、主人の祖母に当たる人が「屋敷の神様」として祀られているということであった。「悪太郎」であった国男は、その祠の中に納められているものへの好奇心止みがたく、或る「春の日」に「誰もみない時恐る恐るそれをあけてみ」た。そして、そこにあった「一握りくらゐの大ききのじつに奇麗な蠟石の珠」を「そうつと覗いた時、フーッと興奮してしまって、何ともいへない妙な氣持にな」り、「しやがんだまゝよく晴れた青い空を見上」げたが、彼はそこに、「お星様」を見て「ぼんやりした氣分」になってしまった。その時「突然高い空で鶉がピーッと鳴」いたことによって、「身がギュッと引きしまつて初めて人心地」に帰ることができた。

この時の感想を国男は次のように述べるのである。

「今も鮮やかに覚えてゐるが、じつに澄み切つた青い空で、そこにたしかに數十の星を見たのである。」「今考へ直してみても、あれはたしかに異常心理だつたと思ふ。」「あの時に鶉が鳴かなかつたら、私はあのまゝ氣が變になつてゐたんぢやないかと思ふのである。」「子供の癖に一際違つた境遇におかれてゐたが、あんな風でながくゐてはいけなかつたかも知れない。幸ひにして私はその後實際生活の苦勞をしたので救はれた。」

これを読んで小林秀雄氏は、国男の本質に触れた感動を、

「鶉が鳴かなかつたら發狂したであろうというような、そういう柳田さんの感受性が、その学問のうちで大きな役割を果たしていることを感じたのです。--- 真昼の春の空に星のかがやくのを見たように、珠に宿つたおばあさんの魂を見たからでしょう。柳田さん自身それを少しも疑つてはいない。疑つていて、こんな話を、『ある神秘的な暗示』として書ける筈がないのです。」(30)

と述べている。

この祠は現存し、「純誠祖妣神主」を神名とする。珠は百六歳まで長命した祭神の媼が生前に、中風の床でいつも撫でまわしていたものであったという。(31)

こうした国男の資質はその後も見られ、二十一歳の一高時代から次々に発表した新体詩には、

夕ぐれに眠のさめしとき  
うたて此世はをぐらきを  
何しにわれはさめやらむ  
いぎ今いちどかへらばや  
うつくしかりし夢の世に  
夕づゝ  
かのたそがれの国にこそ  
こひしき皆はいますなれ

うしと此世を見るならば  
我をいざなへゆふづよ

---

(32)

というような詩が延々とつづき、ここに見られる「夕ぐれ」・「夢」のみならず、「墓」が頻出し、他界願望ともいうべき情念がみられる。そしてそこには、この世の生はこの世で終わるのではなく、<sup>うつしよ</sup> 顕世と<sup>かくりよ</sup> 幽世との連続観や交信を信じる平田派の幽冥道が見られるのである。

その幽冥道はよく言われるように、十八歳で入門した和歌の師松浦萩坪からの平田派幽冥道の影響があるにしても、その素地をなしていたのは松岡家独特のものであったと言わなければならない。それは、小鶴に如実に見られた鬱病的資質が、賢次に継承されて「座敷牢」に入れなければならないほどの強度の「神経衰弱」となり、その資質を持ちながら平田派の幽冥道の信者となって「平田派の神主」になった。その資質と信仰が国男にも継承された結果が、柳田学の核心を成しているのである。

三十一歳の国男が明治三十八年に発表した『幽冥談』において、幽冥道の信者として自分に影響を与えた人として、「現に名は言はれないけれども今日生きておって、吾々が交際している人の中に、口に出してこそ言わないけれども<sup>かた</sup> 確くそれを信じている人が二人ある。」と語っている。(33) 一人は松浦萩坪であり、もう一人は、これより九年前に逝去した賢次であることは間違いない。折口信夫が、

「一口に言へば、先生の学問は『神』を目的としてゐる。---先生の學問の初めが、平田學に似てゐるといふと、先生も不愉快に思はれ、あなた方も不思議に思はれるかも知れません。---とにかく平田翁の歩いた道を、先生は自分で歩いてゐられたことも事實なのです。」(34)

と言う、その平田学の軌道を最初に敷いたのは父賢次であった。

明治三十一年から翌年にかけて、両親の相次ぐ死に続いて、激しい恋愛に苦しんでいた二十四歳の国男は、親友の田山花袋への手紙に、「眼を閉ちて思へば何物か急に我に迫り来るが如し 日中頭に軋るか如き痛みあり 夜は悪熱恠を醸し来りて殆我を狂せしめんとす」と、祖母小鶴に似た症状を訴えている。また、四十五歳で貴族院書記官長を辞任したのは、議長徳川家達との不和であったと国男は公言しているが、退官願には「宿痾差重く」と書いており、医者<sup>の</sup>診断書にも「病名 神経衰弱」とあるのは、本物の“神経衰弱”が“宿痾”であったからである。また、昭和三・四年頃にも「危機」的状况を迎えた。娘の三千によれば「軽い神経衰弱」であったというが、この時期の国男は、同居する弟子達を辟易させるほどの焦燥感を見せて、岡正雄を去らせただけでなく、雑誌『民族』を休刊しなければなくなるまで周囲から孤立した。神経衰弱は「軽い」ものでは済まされないのが実態であった。

こうした“宿痾”であった神経衰弱の背景には、柳田民俗学に見られる二面性の中で揺れ動かずにはおれない、国男の資質ゆえの、一種の“業”ともいうべき側面が隠されている。明治四十三年の『遠野物語』以降の初期の作品では、天狗・山人などをテーマとし、国

男の資質に適う無理のない歩みをつづけることができた。それが昭和初年には、我が国民俗学の組織者として、客観に徹した“実証科学”としての体制を完備する必要に迫られることになり、彼本来の豊かな感性を“括弧に括”って孤軍奮闘することを余儀なくされ、厳しく自己の資質を抑圧しなけりばならなかつた。

それが、戦後の『先祖の話』や『海上の道』の時代になると、再びその資質が解放されて本来の軌道に還り、幽冥道を基盤として、神・他界・信仰を中心とする「不可視のもの探求者」として、自然体の道を歩むことができるようになったのである。岡谷公二氏が断言するように、国男は、「断じて実証主義者などではなか」つたのであり、<sup>(35)</sup>家永三郎氏が、

「科学たるべくして実際は柳田氏と云ふ一天才の個人芸に過ぎない。---それは科学と云ふよりもむしろ芸術である。---そこに柳田史学の他の追随を許さぬ独自の天地がある、ともいえるが、同時に科学としての本質的限界が横たはつてゐる---」<sup>(36)</sup>

というのが柳田学の真実の姿なのである。

だがしかし、家永氏の批判はその“科学性”に疑問を投げかけてのものであるが、氏が限界と見たところにこそ、人の心を感動させて止まない柳田学の核心と偉大性があるのであり、その基盤として、松岡家の歴史によって醸成された、幽暗なるものに感応して止まない資質が、国男にも継承されていることを忘れてはならないのである。

国男に弟子の礼をとつた折口信夫もまた、「己の出生に関する疑いの深さと苦しみ」から十六歳で自殺未遂をし、その後も、「たびたび『陰鬱の鬼』に襲われ」、「感謝すべき『死に神の足音』」を聴きながら、「遠い昔の心にとりついた死の世界に誘いこまれる時の魅惑」を終生意識して生きつづけたたという。<sup>(37)</sup>

この日本民俗学の両雄は、共に常人の域を超えた資質の人であり、平田学の幽冥道を生きた人であつたのである。

## 脚注

- (1) 原漢文。『松岡小鶴女史遺稿』大正十一年、松岡鼎発行(非売品)。福崎町柳田国男記念館蔵。
- (2) 日本図書『女流著作解題』の「松岡小鶴」
- (3) 原漢文。『松岡小鶴女史遺稿』
- (4) 『北国紀行』(『集』3-173)
- (5) 『集』月報26。本文には句読点がないが隠岐が施した。
- (6) このあたりの事情に付いての『故郷七十年』と『旧派歌がたり』における国男の証言には矛盾がみられる。『兵庫県史』5・『姫路城史』下巻・『姫路藩の人物群像』に拠れば、仁壽山饗が好古堂に吸収合併されたのは天保十三年であり、賢次十一歳の年になってしまふ。しかし、『兵庫県教育史』は仁壽山饗の廃校を十五年としており、賢次が梅谷家に入ったその年に廃校直前の仁壽山饗に入学し、翌年十四歳の時に好古堂に編入学したということにすることができる。
- (7) 芳賀登著：『大国隆正の学問と思想—その社会的機能を中心として—』(岩波古典思

想体系50所収)

- (8) 川島友次著：『秋本安民と勤王運動』（傳記學會編『国学者研究』所修）
- (9) 『松岡小鶴女史傳』（明治24年7月『女学雑誌272号』）
- (10) 柳田泉著：『詩人時代の柳田国男先生』（日本文学研究資料叢書所収）
- (11) 大原政代著：『播磨における尊王思想の存在形態』（兵庫教育大学修士論文）
- (12) 『姫路城下史』下
- (13) 『さゝやかなる昔』所収『柳田国男自傳』（『集』23-506）
- (14) 『兵庫県史』5
- (15) 柳田泉著：前掲書
- (16) 『兵庫県史』5・橋本政次著『姫路城史』下巻
- (17) 『旧派歌がたり』
- (18) 『「黒」を憶ふ』（『集』22-464）
- (19) 注(13)に同じ
- (20) 『玉たすき』（新平田篤胤全集七-237）
- (21) 大久保正著：『柳田国男における国学の伝統』（『国語と国文学』昭和57年7月号）
- (22) 宮崎修二郎著：『柳田国男 その原郷』
- (23) 『集』月報31 生田清著『順正書院のこと』
- (24) 岸本由輝著『柳田国男・民俗学への模索』。なお、この三木家の蔵書は四万冊にも及ぶ膨大なものであったが、現在その大部分は岡山県の金光教本部にある（宮崎：前掲書）。
- (25) 『松岡小鶴女史遺稿』所収『松岡操君碑文』
- (26) 宮本常一著：『柳田国男の旅』（『評伝柳田国男』所収）
- (27) 松岡操君碑文（同上所収）
- (28) 『さゝやかなる昔』所収『少年讀書記』（『集』23-473）
- (29) 『故郷七十年』・『山の人生』（『集』3-80）
- (30) 小林秀雄著：『信ずることと知ること』（『諸君！』8-7）
- (31) 牧田茂編著：『評伝、柳田国男』p35
- (32) 『柳田国男全集』（1991年）32巻。なお、これらの「初期文学作品」は国男の「峻拒」により『集』には掲載されていない。
- (33) 『柳田国男全集』31。国男に平田派の“幽冥道”の影響が濃厚に見られるこのこの作品もまた『集』では削除されている。自分に都合の悪い経歴・作品を隠匿しようとする国男の性癖には、留意すべきである。
- (34) 中公文庫『折口信夫全集』16-512～『先生の学問』
- (35) 岡谷公二著：『殺されたん詩人—柳田国男の恋と学問—』p82～
- (36) 家永三郎著：『柳田史学論』（『柳田国男研究資料集成』第3巻所収p140）
- (37) 岡野弘彦著：『折口信夫の記』p17・115・140・171